



金沢大学名誉教授

かわかみ みつひこ
川上 光彦さん

「地方都市」を語るとき、「中心市街地の空洞化」や「シャッター通り」が枕詞のように使われるようになったのはいつからだろう。反比例するかのようには開発が進められた郊外市街地も今や、世帯の高齢化や空き家の増加などの問題に直面している。

地方では財源も人材も限られているが、地方分権に伴い権限委譲が進む中、「都市づくりについて行政担当者や建設コンサルタント、大学研究者の方々と協働してこれまで取り組んできたことをまとめ、地方都市が抱える諸問題を克服する戦略として提示したい」との思いで編んだのが著書だ。

ことし3月の退職を機に、関係者22人に執筆を呼びかけたところ、快く引き受けてもらったという。テーマは受託者それぞれの専門である、計画制度、都市交通、住宅施策、歴史的市街地や景観、コミュニティビジネス、市民参加など多様だ。

「必ずしもすべてを網羅し

地方自らが考え取り組むまちづくり

著者と
1時間

地方都市の再生戦略

学芸出版社 3,675円

ているわけではなく、紙幅も限られ執筆者も多いために突っ込んだ展開ができていないかもしれないが、いずれも今後の地方都市再生を考える際に必要かつ主要なテーマばかりであり、再生へのヒントや指針を提供していると確信している」。穏やかだが自信に満ちた語り口だ。

「地方都市に関する類似の本がないわけではないが、本書の一番の特徴は、地方をフィールドにしている実務者、研究者が書いたこと」と言い、それはそのまま「市町村が自ら汗をかき、地域特性に応じてさまざまな制度や手法を活用しつつ、独自の政策を考えながら進めることがこれからのまちづくりのあり方だ」と

の主張に重なる。

「成長発展型の発想や仕組みから脱却し、持続可能な都市づくりのための人材育成と仕組みの構築が重要になっている。国の支援は必要だが、具体的な適用は地方主体でやるような仕組みを設け、そこに支援が廻るようにつなぎだ」と力を込める。「地方自治体の都市政策の担当者、建設コンサルタント、まちづくりに関心のある市民、学生にぜひ本書を読んでいただきたい。地域が工夫しながら取り組んでいく一助になれば願っている」

今後は、自身が長くフィールドにしてきた金沢のまちづくりについて本をまとめてみたいという。



土地利用や都市交通、住宅政策、市民参加など5部分に分け、序章、結章を合わせると全24章で構成。行政担当者や建設コンサルタント、大学研究者など、いずれも金沢市をフィールドに都市づくりに関する実務や研究活動をしている22人がそれぞれ

地域主体の都市づくり不可欠

の専門分野について論じている。取り組みの紹介は金沢や富山などの北陸地域に限らず全国の地方都市の特徴的な事例にも及び、課題解決のための対策も分野横断的な総合的視点で提示されている。共通しているのは、地方都市の再生は、その地域が主体となって地域特性に応じた都市づくりを進めていく以外になく、そのためには人材の育成、新たな仕組みの構築が不可欠であるとの認識だ。

